本棚ぶらり

句会の世界へようこそ

～異色の句会「東京マッハ」にまつわる４冊～

平成23年、世界で初めて有料の公開句会ライブイベント「東京マッハ」が開催されました。かしこまったイメージだけではない、エキサイティングで知的なコミュニケーションゲームの側面を強く打ち出したこの句会は、現在も回を重ね、好評を博しています。今回は、そのレギュラーメンバー（堀本裕樹・千野帽子・長嶋有・米光一成）の著作をご紹介しましょう。

俳人・堀本裕樹さんの『芸人と俳人』（又吉直樹との共著 集英社 2015）は、まだ芥川賞を受賞する前の又吉さんを生徒役に、２年間かけて俳句や句会の神髄を伝えた対談集です。文学的な感性にあふれる又吉さんですら、俳句のルールにとまどい、陳腐な句を作ってしまわないかと恐れを抱きます。それを優しくときほぐして、俳句の楽しさ、奥深さへと導く堀本さんの語り口は誠実で丁寧です。いつの間にか読者も俳句の魅力に引き込まれていきます。

同じく堀本さんの『いるか句会へようこそ！ 恋の句を捧げる杏の物語』（駿河台出版社 2014）は、前代未聞の「句会小説」にして恋愛小説です。主人公の大学生・杏は「いるか句会」のイケメン参加者を目当てに、予備知識ゼロで句会に参加し始めます。句会や吟行を経て、杏の恋心はますます募りますが、俳句はスランプ状態に。句会ではまず、出席者全員の句を作者がわからないようにします。そして、各自がよいと思う句を「選句」し、最後に作者を明かして「選評」する習わしなのですが、最終章では選評中に思いがけないドラマが巻き起こり……。読者も杏と一緒に俳句に親しむことができる素敵な作品です。

『芸人と俳人』

又吉直樹・堀本裕樹／著
集英社（2015）

千野帽子さんの『俳句いきなり入門』（NHK出版 2012）は、本業は俳人ではなく文筆家だから「横から目線」だと謙遜しつつ、普通の入門書では目にすることのないラディカルな筆致で読者を鼓舞します。

思わずクスッと吹き出してしまう、絶妙な省略が並ぶ句集『春のお辞儀』（ふらんす堂 2014）は、芥川賞作家にして俳人の長嶋有さんの作品。17字の奥に眠っているモノは何か、イマジネーションのセンスが問われます。

人気パズルゲーム「ぷよぷよ」の作者で、ゲーム作家・ライターとして活躍する、米光一成さんもメンバーです。句会のゲーム性を象徴するメンバー構成と言えるでしょう。句会は日本語話者にだけ許された、深遠で歴史あるワードゲームと言えるのかもしれません。

大人も楽しめる 絵本の世界 第12回

『なにも もたない くまの王さま』

エリック・ファン・オスとエレ・ファン・リースハウト／文
パウラ・ヘリッツェン／絵　野坂悦子／訳
ソニー・マガジンズ（2006）

立派なお城を飛び出し、町で暮らすことにしたくまの王さま。今日からは、お風呂に入るのもパジャマを着るのも、自分でなんでもする生活が始まるのです。でもお妃さまや街のみんなは、そんな王さまの行動が理解できなくて……。

乗ってきた金ぴかの馬車は売ってしまい、召使もいない、大事な王冠まで大臣に譲ってしまうくまの王さまを、町の人たちは「なんにも持っていない」とばかにします。でも王さまは、「自分の好きなものがあれば、あとはなんにもいらないんだよ」と声高らかに宣言します。そしてそんな王さまに付いていくことを決意したお妃さま。でも「あとはなんにもいらない」と言いながらも、部屋に入りきれないくらいのすごい荷物をお城から持ってきたみたいですが……。

「大切なものはなんなのか」「心の豊かさとはなんなのか」を私たちに問いかけるこの絵本。大人ならきっと今の生活から逃げ出したいという気持ちを持ったことがあるはず。豊かさを極めたからこそたどりついた「大事なもの以外なにもいらない」という王さまの思い切った行動は、ちょっと憧れるけど、実現するのはかなり難しい。子どもと比べて人生経験が豊富で、日々の生活に疲れている大人の方が、より共感できる絵本といえるでしょう。せめてこの本を読んで、王さまのような朗らかな笑顔になってください。